

能代北高跡地のワークショップニューズレター

これから、ここから。

From here and now

The former site of Noshirokita Senior High School and the future of Noshiro City

Vol.2

Newsletter

北高跡地で取り組む実験的なプロジェクトを考えてみました！

アーカイブはこちらから
NPO法人アーキセンターあきた
#北高跡地利活用



能代北高跡地利活用の可能性を探るワークショップ

2014年3月に秋田県から能代市に譲与された能代北高跡地。更地となって7年、これまで複数の提案や意見があり、周辺の商店街を含めたつながりを考慮した検討が必要とされてきました。2020年度は秋田公立美術大学が利活用基礎調査を実施。恒常的な施設を建設することを想定した地域の文化経済を底上げする新しい文化施設プログラムの提案と、実験的に仮設建築物を増設することを想定し、中心市街地活性化に向けた機運を醸成する思考継続型プロジェクトを提案しました。2021年度は、この検討成果に対する住民の意向把握やまちづくりへの関心を高めるため、利活用の可能性を検討するワークショップを開催。ニューズレター Vol.2では第2回ワークショップを報告します。(企画・運営：秋田公立美術大学)

WS (ワークショップ) スケジュール

今年度は3回のWSや高校生対象のWSを通して、能代北高跡地のポテンシャルを引き出す実験的なプロジェクトを具体的に考えていきます。WSの内容は、能代市役所のウェブサイトやニューズレターにて随時ご報告いたします。

- 第1回 WS：2021年10月17日 (日) 13:00~16:00
- 第2回 WS：2021年11月28日 (日) 13:00~16:00
- 高校生 WS：2021年12月09日 (木) 13:00~15:00
- 第3回 WS：2022年 1月16日 (日) 13:00~16:00



北高跡地利活用に関する能代市のウェブサイトはこちら

第2回 ワークショップ

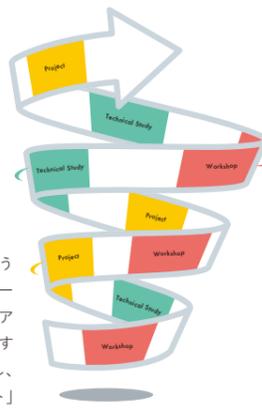
日時：2021年11月28日 (日) 13:00~16:00
場所：能代市役所 会議室9・10

プログラム

- 事業について
- 第1回WSの報告・分析
- ワーク 北高跡地で取り組むプロジェクトを考える
- 前半 短期・中長期プロジェクトを提案
- 後半 短期プロジェクトを深掘りする
- 成果発表

- プロジェクト
Project
- 技術的検討
Technical Study
- ワークショップ
Workshop

創造的な意見交換を行う「ワークショップ」と、ワークショップで出たアイデアを専門的な視点から検証する「技術的検討」を繰り返す、実施可能な「プロジェクト」を考えていきます。



▲ 2021年度以降の検討イメージ

時間をかけて、意見交換と実験を続けるプロセスが必要

ワークショップではまず最初に能代市企画部総合政策課が挨拶。「北高跡地に期待する機能は多岐にわたるものであり、その効果は中心市街地活性化、さらには市全体の活性化につながっていくものであると感じています。利活用については市民の皆さんと一体となって進めるべきであると認識しており、さまざまなアイデアが出てくることを期待しています」(堀井智昭課長補佐)。その後、昨年度行った基礎調査の概要を小杉栄次郎(秋田公立美術大学教授)があらためて報告。また、提案した仮設建築とはゴールではなくプロセスとしてのIncubation施設(孵化装置)であり、これまでの公共施設における計画の在り方を見直し、時間をかけて実験を重ねていく必要があることを説明しました。

能代北高跡地利活用スタートブック/2021 「これから、ここから。」

北高跡地の歴史的背景や利活用における基本コンセプトの検討、思考継続型プロジェクトの提案などで構成した能代北高跡地利活用スタートブック。



スタートブックについての詳細はこちら

暫定的で実験的なプロジェクトを北高跡地という公共空間で繰り返していく

北高跡地の機能を複合的に検討した第1回ワークショップに続き、第2回目は前回の内容をどう具体化していくかがテーマです。北高跡地で取り組むプロジェクトを短期と中長期それぞれのタイムスパンで考えながら可能性を探ります。ワークショップに入る前に、井上宗則(秋田公立美術大学准教授)が前回の内容を振り返りつつ、国内外で広がる暫定的で実験的なプロジェクトの事例やその可能性を紹介しました。

井上：第1回ワークショップでは、さまざまな機能が期待できる北高跡地のポテンシャルが示されました。今回のワークショップは、そのポテンシャルを顕在化するために、北高跡地で実際にやってみたい短期・中長期プロジェクトを考えるというものです。例えば、ランドマークがほしいという意見に対していきなり展望台を計画するのではなく、はしご車を使って望ましい高さを検証するイベントをしてみる。あるいは、防災拠点にするというアイデアに対しては、災害時を想定した防災キャンプをやってみる。防災キャンプをやってみると、防災も重要だけど純粋にテントでの寝泊まりが楽しかったという声が出てくるかもしれない。それならば、北高跡地をキャ



られつつあります。2020年に出版された『テンポラリーアーキテクチャー：仮設建築と社会実験』には、参考になる事例が多く掲載されています。例えば、愛知県岡崎市の橋のたもとにつくられた「殿橋テラス」は、さまざまな規制がかかる場所をまずは仮設店舗として利用することで、その魅力が「見える化」され、常設化が推進されていくという事例です。また、オランダのアムステルダム市郊外の畑だった駅前を、10年間の期限付きで交流スペースに変えたプロジェクトが紹介されています。これは、駅前にコーヒーが飲める場所が欲しいという住民の声に、行政側が土地の暫定利用の許可という形で応えた事例です。いずれも共通していることは、まずはやってみようという精神です。仮に失敗したとしても、仮設的・暫定的な空間利用であれば、やり直すことができます。このように、公共空間における暫定的で実験的なプロジェクトが国内外で進められており、北高跡地においてもこの手法を応用して、利活用を検討していくことを考えました。今回のワークショップでは、空間的な実践を繰り返しながら場所の可能性を引き出していき、そんなプロジェクトを皆さんに提案していただきたいと考えています。



井上宗則(秋田公立美術大学准教授)

ンブができるような場所として考えてもいいのではないかと、というように議論が展開していく。今回のようなワークショップとその空間的な実践を繰り返すことで、北高跡地のポテンシャルを最大限に引き出すことができるのではないかとイメージしています。都市計画の分野では、こうした実験的な空間利用を通してその場のあり方を考えていく手法の有用性が世界的に認め

ワークショップのグラフィックをPDFでご覧いただけます。

ワーク

「北高跡地で取り組むプロジェクト(短期・中長期)を考える」

前半は「質」より「量」でたくさんのプロジェクトを考え、アイデアを出してもらい、中間報告を挟んで後半は短期プロジェクトを深掘りしていただきました。

1 グループ

短期プロジェクトとしては、**防災とイベント広場**…防災イベントのほか防災意識に関するアンケートをとるなどして話し合い、防災意識を高める場に。過去の災害に関しても情報発信していく。
子どもや女性が集まる場…子どもたちにスペースを自由に使ってもらい、活用方法を考えるプロジェクトを始めた20代の女性たちにイベントを企画してもらったり。この場所を実際に使う次世代が考えるきっかけをつくれれば関わる人が増え、うまく活用されていくのではないかと。きっかけとして、例えば華やかなイルミネーションイベントをしてみるなど実験を。
スタートアップ支援…起業をサポートする助成金や、販売・発信などに着手できる仮設の拠点。あるいは著名なプロデューサーにプロデュースしてもらった拠点に。
文化財…実験的なIncubation施設とするにせよ、その核に文化財展示を含めた文教施設は必要。最終的には人を育て、土地の意識を醸成することにつなげたい。
以上のような提案がありました。中長期としては、若い人が集まる場として大学があること。松原を復活させて人が来るきっかけにすること。短期と中長期の間として、木育によって意識の醸成を含めた遊びの場という提案がありました。



2
グループ

短期的にはアムステルダム事例などを参考にまずは挑戦してみようということで、木で組み立てたコンテナを使って実験的に何か始めてはどうかという話になりました。具体的には小規模なスーパーのような場所。人が集まればイベントをする意味も出てきます。コンテナの周りで雪まつりや盆踊りをしたり、七夕と連携したり。文化財施設もまずは仮設建築的なかたちから始めて必要となる要件を考え、文化財をリスト化し、小さな展示会からという話になりました。中長期的には大きめの建物を建て、企業のヘルプデスクやコールセンターがあれば雇用が生まれ、人口増加のきっかけになるのではないかと。外国人労働者も来られる空間にしていけるのではないかと。スケボーや自転車などの練習ができる運動施設をついたら、など。能代にはまとまった空き地がないので風の松原を飛び地的につくって運動したり、イベントとつなげたりできればという意見もありました。

グループではコンテナにしる仮設建築にしる、人が集まることが大事であると話し合いました。人の集まりが継続していくことで自走できる仕掛けを考えていきたいと思います。全体の着地点となりました。

3
グループ

短期的なプロジェクトとしては、雨風をしのげる屋根を設けた屋台村で四季を楽しむことや、自然を活かしたイベントなどが挙げられました。イベントは、立地を生かして夕日、星空、日本海や白神山地を眺めながらビールを飲んだり、カーシアターのように屋外で映画を観たり、能代の郷土食を味わったり。自然を自分たちで育てていく意味で植樹や芝生張りイベントの提案もありました。教育的な面では、べらぼう風や子ども七夕、天空の不夜城といった能代の文化もそこで子どもたちに伝えられるのではないかと。自然を活かす提案のなかではグランピングが挙げられ、気軽にきて遊んで星空を見てビールを飲んで、能代を楽しめる場所になれば市民も観光客も集まるのではという意見がありました。

長期的には文化財施設を核として機能を複合し、能代のランドマークになるような施設にしたいという思いがありました。それにプラスした仮設的なものとして、広場でイベントを開催していく。あるいは、災害について知ることができたり、白神山地や洋上風力発電が見渡せるような展望台の役割が必要との意見もありました。

4
グループ

提案があったのは、多世代交流イベントでの語りによる歴史伝承の場づくりや、組子細工や木のおもちゃづくりを通じた木工体験イベントです。屋外ではグランピング×カーシアター。中長期的には能代の木材と木工技術を使ったホテルなどの提案がありました。スポーツでは、小規模のスポーツ体験を複数用意して健康的な遊びができる空間づくり。ウォーキング案では北高跡地をスタートしてガイドを付けて街をめぐると語りとスポーツを組み合わせたものなども考えました。能代は空が広くてきれいなので、天体観測やJAXAとコラボした宇宙イベントを開催するなど星空を活用することもできるのではないかと。これらを現在、北高跡地で開催している6の市と共に春夏秋冬のイベントとして開催して、山菜や山菜料理、白神ネギの焼きネギや焼き芋、きのこ、新米が味わえる食のイベント、凧あげ、古本市、クリスマスマーケット、スポーツなども絡めていければと思います。広い土地を活用してギネスチャレンジをしたいという意見もありました。



既成概念に捉われず、楽しい未来を想像する

未来の街の姿を思い描き議論することは、本来楽しいことであり、ワクワクすることこそ可能性が広がります。現状の課題解決に目が行き過ぎると、既成概念に捉われてその楽しさを忘れてしまいがちですが、今回のワークでは、和気あいあいとしたなかで、それぞれが楽しい未来を思い描き、活発な意見が交わされていて、とても心強く感じました。皆さんのプロジェクトを具体的にどのように実現していくのか、今後一緒に考えていきたいと思います。



小杉 栄次郎

中長期的な視点で、短期的な実験プロジェクトを

実施したいプロジェクトを具体的に議論していただいたことで、更地である今の状態からできること、できないことがはっきりしてきました。建物がなければダメだという意見は、建築を専門にしている立場としては心強い言葉でもあります。一方で、後の世代に箱物行政と批判されないためにも、中長期的な視点に立ちつつ、短期的で実験的なプロジェクトを何度も考え実行していくこと、思考を継続していくことが重要だと改めて感じました。



井上 宗則

この場所で、実験と思考を繰り返して

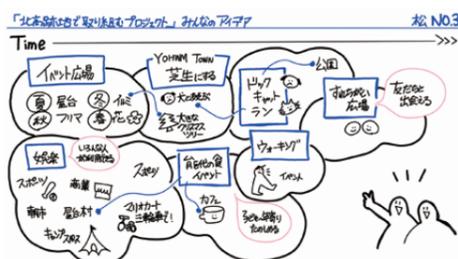
新しいものを生み出すプロセスには、より多くの想像を許容する余白が必要です。今回提案されたプロジェクトには、実施の結果、成功・失敗という二項対立では語りきれないような物語を想像してしまうものもありました。幼い頃の記憶に残っている北高が時を経て更地となり、今後この場所で多くの実験と思考が繰り返され、見たこともないような景観が創造されていく、その第一歩に立ち会っていることをリアルに体感したワークショップでした。(秋田公立美術大学助手・能代市出身)



船山 哲郎

高校生ワークショップ

秋田県立能代松陽高等学校で12月9日(木)、高校生ワークショップを行いました。第1回ワークショップにも参加してくれた生徒も含めた2年生36人が参加。6グループに分かれ、北高跡地で実験的に取り組んでみたい短期・中長期プロジェクトのアイデアを話し合いました。北高跡地を実際に活用することになる次世代には、積極的に実験に関わってもらえたらと考えています。



ファシリテーターの皆さんから



工藤 尚悟さん

社会の持続可能性を考えるサステナビリティ学を専門とする国際教養大学准教授。能代市出身。



佐藤 洋光さん

5000人規模YouTuberの動画編集や小中高生のための塾検索サイト運営などで活動中。北秋田市出身。

私は過疎地域を対象とする研究者で、「持続可能な地域にはどのような特徴があるのか」というテーマに取り組んでいます。現段階の私の答えは、「自ら学ぶ地域」です。直面する課題を自ら学ぶ地域は、人口動態の変化のなかでも、きっと人々が豊かに暮らしていくための仕組みを創り出せるでしょう。ご参加いただいているワークショップは、こうした「自ら学ぶ地域」の具体的な姿なのだと思います。



伊藤 晴樹さん

男鹿市地域おこし協力隊を3年間務めた後、教育人材育成を行うTime Colors Lab.を立ち上げる。能代市出身。



壹ツ石 涼里さん

秋田公立美術大学ものづくりデザイン専攻(彫金・プロダクト)3年。大学でグラレコに出会い、今回ファシリテーターとして初めてのワークショップ。北海道網走市出身。

私は能代市の二ツ井町出身ですし、同期には能代北高出身の方方もいるので、北高跡地は身近な話題です。実際にワークショップに参加すると、参加者の皆さんから毎回たくさんの意見が出て、議論が白熱しています。アイデアがどんどんつながっていくこと、素晴らしいポテンシャルを持つ北高跡地にワクワクしています。

アイデア募集中!

能代北高跡地で試してみたい実験的で面白いアイデアを募集しています!



次回のご案内

第3回ワークショップ

日時: 2022年1月16日(日) 13:00~16:00
場所: 能代市役所 会議室9・10ほか

ワークショップのお問い合わせ先:
NPO法人アーツセンターあきた ☎ 018-888-8137

プロジェクトメンバー

小杉栄次郎 (秋田公立美術大学景観デザイン専攻)
井上宗則 (秋田公立美術大学景観デザイン専攻)
船山哲郎 (秋田公立美術大学景観デザイン専攻)
田村剛 (NPO法人アーツセンターあきた)

能代北高跡地のワークショップ
ニューズレター「これから、ここから。」 Vol.2

2022年1月発行
発行 公立大学法人 秋田公立美術大学
〒010-1632 秋田県秋田市新屋大川町12-3
TEL.018-888-8100

※能代北高跡地活用可能性検討業務の一部として作成しています。

デザイン: 越後谷洋徳 写真: 伊藤晴樹、船山哲郎 編集: 高橋ともみ 制作: NPO法人アーツセンターあきた